スティエパン･メシッチ　クロアチア大統領

記者会見

２００８年3月5日

大統領はコソボ独立の根拠を、ユーゴスラビア憲法（１９７４年）の規定から説明した。自らの死を予想したチトー大統領が、ユーゴスラビアの平和的な分離の条件を、そこに組み込んでいたのだ、と。その憲法ではセルビア内の２つの自治州にも、セルビアなど６つの共和国と同等の権利が認められていたので、コソボの独立は他の地域でのいわゆる少数民族の独立問題とは性格が違うというのだ。

© 日本記者クラブ

ご出席の皆さま、国際社会における自分の立場を探るヨーロッパの小国、クロアチア共和国について、日本記者クラブでお話しすることに満足感と責任の重さを感じております。

我が国に興味を持ってくださる方々に、私たちがだれで、何をして、どこへ向かっているのかをお話しし、我が国をもっと知ってもらう機会に恵まれたことをうれしく思います。過去についても交えながら、私たちの現在と未来を喜んでお話ししたいと思います。

しかしながら、このような場面には大きな責任を感じます。というのは、過去を美化することなく、現在の陰の部分も隠すことなく、自分の国を紹介するというのは簡単なことではないからです。特に、このクラブのような場所で、皆さんのような方々にお話しするのは楽なことではありません。それでも、私は何も隠さず、何も美化せず、真実、事実をお話ししたいと思います。

日本と国交を結んで１５年

私の国クロアチア共和国は、独立国として政治的な世界地図に、まだ２０年も存在していません。また、クロアチアと日本が国交を樹立してからまだ１５年です。しかしながら、クロアチアは最近誕生した国ではありません。クロアチアは、１０世紀という早い時期にもう王国として存在していました。その国の強さは、特に海軍についての伝説よっても語り継がれています。

しかし、その後は外国の王朝に統治され、何世紀も支配下に置かれることになります。その間も自国の議会を持つだの、国独自の要素を持ち続けることはでき、消滅するようなことはありませんでした。

第一次世界大戦のときは、オーストリア・ハンガリー帝国の支配のもとにありましたが、外国の支配に対抗し、東ヨーロッパのほかのスラブ民族との同盟に未来をみいだした、国民運動が力を増していました。オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊は、戦勝国によるヨーロッパ再建とともに、最初のユーゴスラビアの誕生をもたらしました。セルビア王朝のもとに建設された王国ユーゴスラビアは、それまで一度も一緒に住んだことのないスラブ民族の統一国家でありましたが、国民は満足できず、最も人口の多いセルビア人の支配に対する抵抗も生まれました。

チトーのユーゴスラビア

その国家も、１９４１年、ドイツ、イタリアと、その同盟国の攻めにより崩壊しました。共産党の党員であり、歴史に残る人物、チトーが率いる抵抗運動は多くの地域を解放し、その地域を広げていきました。そして、第二次世界大戦前、ユーゴスラビアを復興します。公式には平等の共和国と、一共和国の中に組み込まれた２つの自治州による連邦共和国となりました。

第二のユーゴスラビアは、４５年間存続し、クロアチアはその一共和国でしたが、共産党政権のもとに発展しました。チトーとスターリンとの争いの後、１９４８年、国家共産主義という形の社会主義ができ、時間とともにリベラルになっていきました。

ユーゴスラビアは、外交において冷戦下で対立していた東西のバランスを巧みにとり、当時の国際関係に重要な役割を果たした非同盟運動に力を注ぎました。

１９６８年、チトー大統領が日本に迎えられました。彼は民族的にはクロアチア人なのです。しかし、国内では、以前からの敵意と憎悪がくすぶっていました。ユーゴスラビアは３つの要素を基礎に持ち、それによって統

一されていました。それは、チトーとそのカリスマ性、チトー率いる共産党、そしてチトーが導くユーゴスラビア軍です。

１９８０年のチトーの死の後、その体制が崩れるのは時間の問題でした。これに追い打ちをかけたのがセルビアの新しい指導者、ソロボダン・ミロシェビッチです。彼は民族主義を掲げ、大セルビア実現の政策、すなわち国境を変更するという政策を展開したのです。

ミロシェビッチの大セルビア主義

この国境変更という計画のために、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴビナに住むセルビア人と、ユーゴスラビア軍を利用しようとしたのです。ユーゴスラビア軍は事実上セルビア軍となり、セルビアの計画を遂行する道具となったのでした。危機を避けるため、私たちは連合の形を提案しました。独立を宣言した後、すぐに連合となる署名をし、後に続くユーゴスラビアの構成共和国のモデルになろうとしたのです。

しかしながら、世界には本心を語りませんでしたが、ミロシェビッチはユーゴスラビア連邦にも、新しい連合国にも興味がありませんでした。彼が望んだのは、大セルビアだけだったのです。そこで戦争を始め、戦争犯罪を犯してまでも、自分の目的を果たそうとしたのでした。

クロアチアには、独立宣言をするしか道はありませんでした。その権利を与えてくれたのが、１９７４年からのユーゴスラビアの憲法でした。チトー大統領は自分の死を予想して、ユーゴスラビアの存続及び平和的な分離のための条件を憲法に組み込んでいたのです。その中で、「連邦」はすでに、それまで使われたことのない「連合」になっておりました。また、それによりセルビア内の２つの自治州も、共和国と同等の権利も持つことになり、その結果、自治州の大統領がユーゴスラビア社会主義連邦共和国幹部会の議長、すなわちユーゴスラビアの大統領となったこともありました。

我が国の独立に対し、ミロシェビッチは戦争でこたえました。私たちは防衛をしなければなりませんでした。国際社会、すなわち国連や、その平和維持軍に支えられながら国を守りました。そのとき、多くの国々が人道的な援助をしてくださいました。その中には、日本からの支援もあり、そのことは決して忘れません。

クロアチア側でも戦争犯罪が

ある意味で戦争のため、また、ある意味ではクロアチアの初代大統領の意向により、その当時は与党一党のみの政府で、それがすべてのことを決め、別の政党は飾りにすぎませんでした。防衛のための戦争となったクロアチア側にも、残念ながら戦争犯罪が出ました。第二次世界大戦中からの敵意、憎悪が再燃し、過去を清算しようとする動きも少なくありませんでした。そのようなときに犠牲となるのが罪のない人々なのです。

当時のクロアチア政府は、そのような状況に目をつむり、人道的にも少数民族の権利に対しても目を向けず、何の成果もない政治に没頭し、結果的には世界から孤立してしまいました。

こんな状況に変化が起きたのは、国会議員選挙と大統領選挙の後の２０００年のことでした。当時の野党が連立政権をつくり、私は大統領としてその権限を狭め、国会の民主主義確立に力を注ぐべく改革を行いました。現在、私たちは当時整えた道を進んでいるわけです。

そんな中、さまざまな成功をおさめた一方で、多くの小さな問題にも直面し、時には先に進むのが困難なこともあります。

我が国の国内の大きな目標は、民主主義の定着、人権、少数民族の権利の擁護、法を基礎にした国づくり、過去の問題と決別し、戦争での敵国との関係を改善するとともに、クロアチア側の戦争犯罪の罪を認め、ハーグの国際法廷と協力して裁くことです。

この春のＮＡＴＯ加盟に期待

外交政策においては、まず何よりも欧州連合とＮＡＴＯへの加盟を優先していきます。欧州連合加盟は長いこと望んできたものです。ヨーロッパ全体の平和と発展、すなわち平和の中での発展を保障するものだと受けとめております。ＮＡＴＯについては、我が国の安全を保障してくれるものを望んでいるからです。ＮＡＴＯの加盟は、この春に期待しています。欧州連合との交渉はおくれていますが、２０１０年までには加盟が実現できるものと思っております。

目下、ヨーロッパに適合すべく法や司法制度、行政の改革を行っており、それに追われる毎日です。そんな中、汚職との闘い、過去の政府の陰の部分を明らかにすること、すなわちクロアチア側に罪のある単犯を裁くことが求められています。

近隣諸国との関係は確立しました。自治州であるコソボが独立宣言をした後の騒ぎが、南東ヨーロッパの安定に長い暗い陰を落とすことがないことを信じたいのです。どんな状況になろうとも、クロアチアは安全な地域であることに変わりありません。

コソボが独立を宣言し、セルビアから分離しようとするのは、セルビアがアルバニア人の多い自治州コソボに対して行ってきた誤った政策の結果であることを悟ってほしいと願っています。さらに、コソボを承認した国々に対する報復のような行為は、結局はみずからを傷つけることになるということもわかってほしいと思います。

我が国は、世界の平和と安全、発展に尽くしていきたいと考えています。国連を世界の国々の大切な機関として支援し、現在のさまざまな問題に立ち向かうため、その改革にも協力していきたい。

ヨーロッパや近隣諸国との関係ばかりではなく、クロアチアは世界全体に目を向けています。簡単にいえば、地域やヨーロッパにとどまった政策ではないということです。我が国と友好関係を結び、それを発展させていきたいとするどんな国とも関係を深めたいと思っているのです。もちろん、お互いに満足できる平等の関係を。

私たちが目指すものと、日本との関係を深めたいという私たちの願いを理解していただくため、私は今日、ここでお話しさせていただきました。ありがとうございました。

（質疑応答）

司会（金平茂紀理事）　ありがとうございました。それでは、会場から質問を受けたいと思います。質問のある方は挙手をお願いします。氏名と所属を明らかにして、近くのマイクを使って質問してください。質問は、日本語か、あるいは同行の記者の方もいらっしゃいますので、クロアチア語で、簡潔にお願いします。

石合力（朝日）　大統領、クロアチアは近くコソボを承認する方向だというふうにうかがっていますけれども、そのタイミングについては、どのようにお考えでしょうか。

それで、これが地域情勢、バルカン情勢の安定化につながる動きというふうに歓迎するのか。あるくいは不安定化の要素というふうにみていらっしゃるのか、それについてもお聞かせください。

関連ですけれども、セルビアでタディッチ大統領が再選されましたけれども、彼は親西欧派ともいわれています。クロアチアからみたセルビアのいまの動きというものを、どういうふうにみられているのでしょうか。

メシッチ大統領　クロアチアはいつも現実的な方向をみています。そういう政治を展開しています。コソボの場合、ユーゴスラビアが消滅する前のときからですけれども、ユーゴスラビアの憲法に、それぞれの共和国と、それと自治州の権限がうたわれています。その権限が尊重されていることだというふうにクロアチア側は考えています。

ですので、このことは、私たちが歓迎したい方向に向かっています。ほかの世界の共和国の中にあるこのような国の存在とは違います。ユーゴスラビアのもとからある、セルビアの中にある自治州というのは、それぞれもっと高い権限を持っております。それで、その国が独立するというので、これはとても現実的なことだと考えております。

セルビアは、コソボに対して間違った政策を展開しました。それは、セルビアがまだ王国だった時代にさかのぼります。このときに、セルビアはアルバニア人の権利を剥奪しました。具体的に申しあげれば、言語、それから教育といったところまで、例えばアルバニア語で行う権利まで剥奪しました。

しかしながら、第二次世界大戦の後、チトーがつくりましたユーゴスラビアにおいては、チトーはそれぞれの自治州に同等の権利を与えました。６つある共和国と同じ権利を、セルビアの中にある自治州に与えたのです。

その状況がおかしくなったのはチトーの死後です。ミロシェビッチが政権を握ってからでした。このときミロシェビッチは、２００万人いるコソボのアルバニア人の権利をすべて剥奪し、さらに自分の政策実現のために、つまり大セルビアをつくろうという目標のために、クロアチアの中の少数民族であるセルビア人をコソボに移住させました。コソボのアルバニア人を追い出そうという試みをしたのです。

セルビアは、アルバニア人とよい関係を築くことは十分にできたはずです。アルバニア人に自治権を戻し、そしていままでのコソボに対する政策を謝るべきだと思っております。特に、自分のところから出した戦争犯罪人などを裁くことにより、謝罪するべきだと考えております。

こういった少数民族は、戦争のきっかけとなる人たちではなくて、例えばコソボの場合は、アルバニアとの関係を築く大切な人たち、そういうふうにとるべきだと思っております。

セルビアの新しい大統領、タディッチ大統領は、決して親ヨーロッパだとは考えておりません。セルビアは旧ユーゴスラビアの各地で起きた戦争を始めた張本人です。ですので、ミロシェビッチの後の政権ですけれども、タディッチ氏にはもう少しヨーロッパに近づいていただいて、周りの国々との関係を良好に築くように努めていただきたいと思っております。

嶋田昭浩（東京新聞）　関連なんですけれども、コソボの独立宣言を受けまして、逆に、大アルバニア主義への懸念というものが広がっているんじゃないかと思うんですが、それについての見解をおうかがいしたい。

メシッチ大統領　そういった見解は、私たちは持っておりません。と申しますのは、コソボはやはり特別な別の国です。ルーマニアとモルトバがまた違う国として存在しているのと同じように、私たちは、アルバニアとコソボを別々に考えております。大アルバニア主義といった思想があって、いま危険な状態にあるとは一切考えておりません。

森本英之（朝日ＯＢ）　ユーゴの内乱の報道をみていて、果たして民族独立ということが唯一絶対の価値観なのかということに疑問を持つようになりました。攻めていった側が、相手側の女性を暴力で犯し、そして妊娠させて、中絶ができないようになるまで解放しなかった、というようなことがいま裁判で訴えられています。どうも背景には、雄染色体の論理、つまり雄の論理が働いているような気がする。本来アフリカから一人のイブの子孫として始まったというミトコンドリアの論理ならば、こういう内乱にはならないのではないか。何か動物の論理ではなくて、新たな人類の論理としてのアイディアが大統領にないのだろうか。そういうことがあれば平和のシステムとして提案していただけないだろうか。

メシッチ大統領　動物界には、レイプというものは存在しないと思います。それは、ミロシェビッチが始めた戦争の計画の中で起きたことです。私たちが、こういった行為に対し、軽蔑の目を持って対応していくということが大切だと思っております。戦争犯罪人はすべて追及され、もちろん、こういうレイプを犯した人たちも裁かれるべきだと思います。地元の裁判でも裁かれますし、それからハーグの国際戦犯法廷でも、こういうものは裁かれるべきだと思っております。

司会　クロアチアから同行されていらした記者の方、どなたか質問はありますか。なければ、私のほうから質問させていただきますが。

メシッチ大統領　クロアチアの記者の方たちは、私が何を答えるかというのはわかっているので、大丈夫です。

司会　お話でセルビアの民族主義というか、ナショナリズムが諸悪の根源だというようなお考えはよくわかったんですが、例えばコソボの独立については、ロシアが反対している。それからスペインも反対している。ブラジルもルーマニアも反対しているといわれています。必ずしも全員が一致して賛成しているというわけではありません。そのことについては、どういうお考えをお持ちですか。

メシッチ大統領　まだどのくらいの国々がコソボを承認して、どのような状況になるかというのははっきりしておりません。しかし、コソボというのは、先ほど申しましたように、旧ユーゴスラビアの中で、ほかの共和国と同等の権利を持った自治州だったんです。ですので、コソボが独立する権利は大いにあると思っております。

コソボの独立に反対している国々もあるようですけれども、もう一度、しっかり私の意見を申しあげますと、コソボは、例えば旧ソ連内の共和国にある一つの自治権を持った場所とは違うのです。コソボは、旧ユーゴスラビアの憲法の中で、ほかの共和国と同等の権利を持った州、場所だというふうにうたわれていました。

ですから、コソボの独立によって、ほかの同じような問題を抱えている国が、同じようなことがその国で起こるというのは間違った

考え方だと思います。全く違う状況に、コソボの場合はあるのです。

司会　大統領はスピーチで、外国の支配を長い間受け続けたクロアチアの苦難の歴史を語りました。そういう経験を踏まえて、現在のイラクという国が置かれている状況については、どのようにお考えなのでしょうか。

メシッチ大統領　戦争に入るのは簡単ですが、停戦をして戦争から立ち直るというのはどんなに大変なことかということは、私たちの実際の経験でよくわかっております。ですので、イラクが再び戦争ということには、絶対にならないでほしいと思います。

そのためには、イラクの民主主義の確立と、それから宗教上の問題の解決を急いでいただきたいと思っております。

戦争に入らなければならない状況というのは、お互いの憎しみからということはあり得ないと思います。それは、政治的に何かを実現しようとする、それの手段として戦争が起こり得ると思います。例えば、それは地域の問題、それから食料の問題、エネルギーの問題など、いろいろあると思います。そういった問題から戦争に入るのだと思います。しかしながら、戦後は人々に憎悪が残り、これが何世代にもわたり続くという悪い状況になります。

加藤雅彦（ＮＨＫＯＢ）　セルビアのコソボに対する権利を主張する一つの大きな歴史的根拠は、１３８９年のコソボの戦争だと思うのです。それまではセルビア王国の領土であったが、それ以後のトルコの数世紀にわたる領有が、アルバニア人にコソボを占領するチャンスを与えた。こういう歴史的な事実についての大統領の見解をうかがいます。

メシッチ大統領　セルビアのコソボに対する要求、主張というのは、いまおっしゃられたようなそんな昔の戦争のためというふうには私は思っておりません。このときに起きた戦争というのは、トルコの征服によるものなので、私は、関係づけておりません。トルコの支配以前も、以降も、コソボの大多数を占める民族はアルバニア人でした。

セルビアは、いままで行ってきた政策において、この地域を利用して、ほかの国に散らばっている自分たちの民族、すなわちセルビア人をコソボのほうに移民させて、自分の政策を実現させようとしていたのです。第一次世界大戦後も、セルビアは自分の民族を、アルバニア人が非常に多いコソボに移民させ続けておりました。

それは、まだクロアチアがユーゴスラビアだった時代の幹部会においての大きな問題でした。簡単に申しますと、いまでもそういう問題が続いているというふうに考えます。そうしてこういうような状況になったのだと思っております。

司会　そろそろ時間がきたようです。日本とのかかわりについて質問が全く出なかったのですが、クロアチアという国は、日本人の観光客にとても人気があって、クロアチアに行きたいという人たちがいま若い人たちを中心にとてもふえています。そういうことを最後にお伝えしたいと思います。

メシッチ大統領　先ほども申しあげましたように、クロアチアは、周りの状況にかかわらずとても安定しております。皆さま、どうぞ私の国にお越しください。（拍手）

文責・編集部